

飛騨市ファンクラブアンケート調査結果
～関係人口の特徴編～

大阪大学大学院工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻

加賀・武田研究室

目 次

1. 関係人口について	1
1-1. 関係人口とは	
1-2. ファンクラブに存在する関係人口	
1-3. 関係人口の基本属性	
2. 関係人口の飛騨市との関係性	5
2-1. 飛騨市への想い	
2-2. 土地や人との関わり	
2-3. 活動との関わり	
3. 関わりと想いの分布	14
4. まとめと今後の展望について	16

1. 関係人口について

1-1. 関係人口とは

関係人口は 2016 年頃から提唱され始めた人口の概念です。提唱者の一人とされる指出氏は、関係人口を「当該地域への通いや何らかの形でその地域を応援してくれるような人たち」¹と定義しています。関係人口という概念の誕生は、当該地域外に住みながらその地域を応援し支える活動をする人々にスポットライトを当てる形となり、2017 年以降には中央省庁が関係人口を地域活性化に資する人材として位置づけ全国の自治体に関係人口の創出・拡大を促す大きな流れができました。これほどまでに関係人口が注目されるに至った背景には、地方部での急激な人口減少と少子高齢化があります。日本では 1960 年代ごろから都市部の人口集中緩和を目指し、都市部から地方部への人の流れを促す交流・移住施策を進めてきました。バブル崩壊時など一時的に地方へ人口が動く時期もあったものの、結果として東京への一極集中は収まらず、2007 年以降国は本腰を入れて地方部への移住促進政策を打ち出してきました。地域おこし協力隊や田舎で働き隊！などの政策が始まり、2011 年には地方創生を掲げてまち・ひと・しごと創生本部が設置されました。しかし、それでも地方から都市部への人口移動は進み、国や一部地域を除く自治体らは、行政が直接人口移動を促すことへの限界を実感することとなりました。そんな中で関係人口という概念が誕生し、移住者を増やす以外の方法で地域を維持できる可能性が見出されました。このことが、特に人口減少が顕著な地域の自治体を中心に政策の変化をもたらし、現在では 200 を超える地方自治体が関係人口創出・拡大事業に向けて検討を進めたり施行したりするに至っています。

このように関係人口が注目される一方で、関係人口自体が多様な関わり方を認めているため定義が曖昧であり、解釈が主体によって異なることがあります。例えば、当該地域で積極的にボランティア活動をする人々のことは関係人口であると言えますし、自治体の公式 SNS へいいね！などのリアクションをした人でも関係人口とカウントする団体もあります。つまり、関係人口の当該地域との関わりの幅は広く、単純に関係人口と一括りに捉えることが難しいです。特に、行政が戦略的に関係人口を創出・拡大しようとする際に、適切なターゲットを設定するために、関係人口の関係性を分類したりその特徴を明らかにしたりすることが重要となります。

本研究では、総務省や指出氏の関係人口の定義から「当該地域外に住みながら、地域と何かしらの形で関わり、かつ地域のことを応援する気持ちを持っている人」と定義しました。関係人口が交流人口と違う点は、定義中にある「地域のことを応援する気持ち」があるかないかという点で異なると解釈しています。

¹ 指出一正(2016)、ぼくらは地方で幸せをみつける ソトコト流ローカル再生論、ポプラ社

1-2. ファンクラブに存在する関係人口

本分析では、飛騨市ファンクラブ会員に対する web アンケート調査（調査詳細については～基礎分析編～を参照）の回答者の中から、1-1 で示した関係人口の定義に従い関係人口の特定を実施しました。具体的には、①飛騨市以外に居住していること、②飛騨市と何かしらの関わりがあること、③飛騨市のことを応援する気持ちをもっていること、の 3 つを全て満たす人を抽出しました。なお、②に関しては既に飛騨市ファンクラブ会員に登録している時点で全員が満たしていると判断できるため、実際のところ①と③の要件を満たすかどうかで判断をしました。その結果、全回答者 1170 人のうち、932 人(79.7%)と多くが飛騨市の関係人口に該当していることが分かりました。

本結果は、飛騨市のファンクラブ会員施策が効率的に関係人口を確保することに繋がっていることを示しています。つまり、飛騨市ファンクラブ会員を増やすことが、飛騨市の関係人口を増やすことに繋がると言えます。

1-3. 関係人口の基本属性

関係人口の性別は男性が 64.9%と女性よりも多く(男性 605 人、女性 324 人、回答しない 3 人)(図 1)、回答者の年代は 40 代以上が 83.2%(20 代 37 人、30 代 117 人、40 代 194 人、50 代 289 人、60 代 211 人、70 代以上 81 人)と比較的年齢層は高く若者が少ない結果となりました(図 2)。アンケート結果での性別や年代の傾向は、飛騨市ファンクラブ会員全体の傾向と類似しています。

次に居住地では中部地方が 503 人(54.0%)、次いで関東地方が 243 人(26.1%)、近畿地方が 130 人(13.9%)、その他地方(北海道、東北地方、中国地方、四国地方、九州・沖縄地方)が 56 人(6.0%)でした(図 3)。飛騨市の関係人口の半数以上が近隣都道府県に住んでいる点からも、ファンクラブ会員を通じて関係人口となるか否かには当該地域との距離の近さが影響していることが読み取れます。

また、飛騨市ファンクラブ自体はアンケート実施のタイミングで 5 周年を迎えており、ファンクラブの入会歴については、1 年未満が最も多く 25.3%(211 人)、次いで 4 年以上前が 23.9%(199 人)、1~2 年前が 22.7%(189 人)となっていました(図-4)。このことから、最近入った層と、初期に入会した層に多く分布していることが分かりました。

そこで居住地ごとに入会歴をみると(図 5)、入会歴が 1~3 年の人は関東地方に住む割合が多く、3 年以上前に入会した層は中部地方に住む人の割合が多いことが分かりました。アンケート実施の 2 年半前にコロナ禍に入っており、コロナ禍を機に関東地方の入会者が増加していることが分かります。また、ファンクラブ解説初期には中部地方までにしか広まっていなかった制度が、時間とともに外へ情報が発信されるようになり、コロナ禍などの影響が後押しし、関東地方にまで情報が広がっていったことが読み取れます。

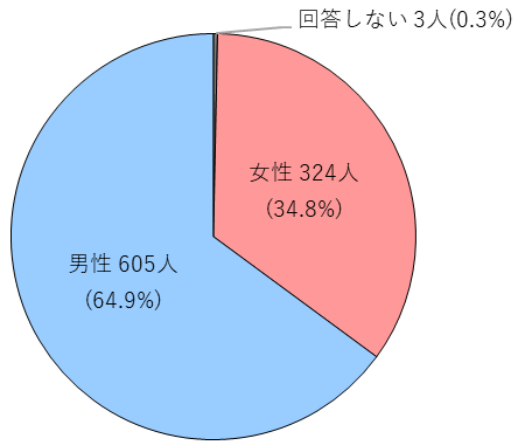


図1 関係人口の性別

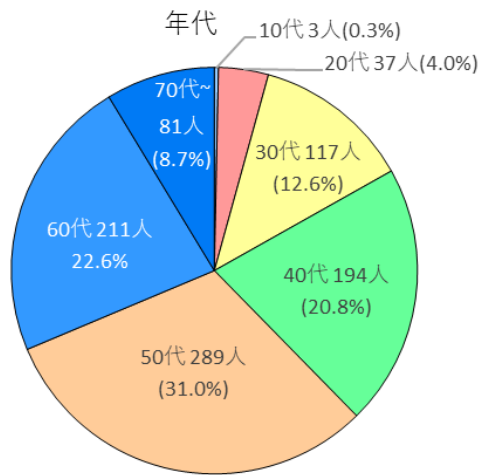


図2 関係人口の年代

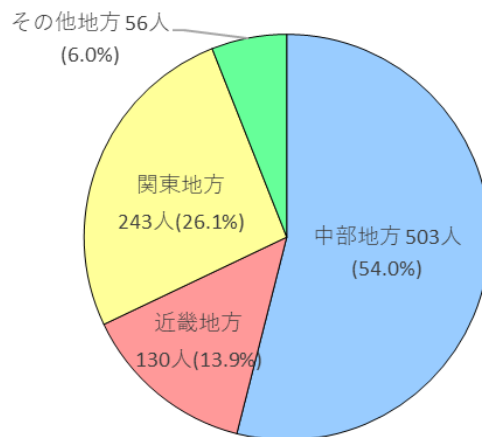


図3 関係人口の居住地方

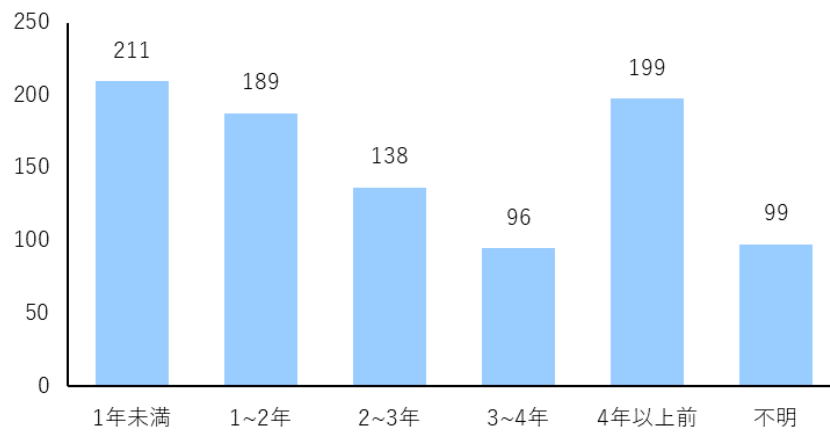


図4 入会歴ごとの分布（人数）

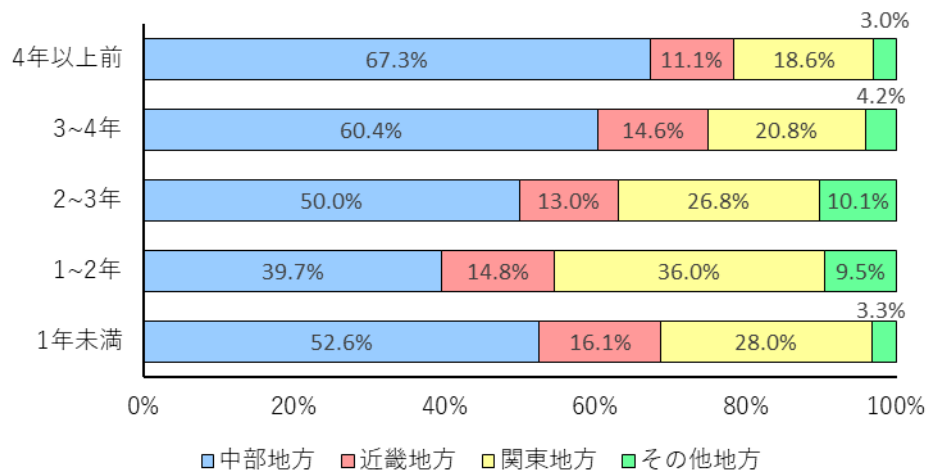


図5 入会歴別での居住地

2. 関係人口の飛騨市との関係性

関係人口の飛騨市との関係性を調査するにあたり、関係性を「関わり」と「想い」の視点に分けて分析を行いました。「関わり」では「土地や人との関わり」と「活動との関わり」、
「想い」では「飛騨市への愛着」と「飛騨市への当事者意識」について調査を行いました。

2-1. 飛騨市への想い

地域への想いを測る指標として、本調査では「地域愛着」と「当事者意識」を用いました。
まず、なぜこれらの指標を用いたかについて簡単に説明します。

地域愛着とは、「人と地域とを結ぶ情緒的な絆や繋がり」²と定義されます。こうした地域に高い愛着を持つ住民は、地域への協力行動や地域づくりへの参加を促すと同時に、地域の持続願望や定住意思との間に有意な相関関係があると報告されており³、まちづくりを円滑に進めるにあたって、地域との良好な関係性を築けているかの指標として認識されています。よって、本調査では飛騨市への愛着の有無や強弱が、飛騨市と関係人口との良好な関係性を示すと想定し、「想い」軸での指標に地域愛着を採用しました。

従来の地域愛着の代表的な調査方法としては、地域の愛着尺度を感情的な3因子（選好、感情、持続願望）13項目で測定するものがありますが、住民に対して地域愛着を感じるかどうかを調査したものであっても地域との良好な関係性を測定できることが既往研究で示されており⁴。よって、本調査においても質問数が少なく測定可能な方法として地域への愛着を直接5段階（とても愛着を感じる、愛着を感じる、やや愛着を感じる、少しは愛着を感じる、全く愛着を感じない）で調査しています。

次に当事者意識とは、本調査では「地域の魅力維持・向上や課題解決に対し自分ごととして捉えることができる」気持ちとしています。今回地域と関係人口との関係性を示す指標として独自で追加した指標となります。関係人口と地域との関係に関する既往研究では、地域への貢献行動意図（地域活動やまちづくり活動に参加したいと思う気持ちのこと）の強弱で測るものがありますが⁵、こうした行動意図に至る前段階に、目標意図（地域に貢献したい）が存在しています（広瀬の環境配慮行動モデルより応用）。そこで心理学の分野で研究が進む援助行動の生起過程モデルをみると、まず課題を認知し、その課題を自分ごととして捉えることによって、どう自分が関わるかを検討するといった行動意図に繋がるのが提案されており、本研究では地域への貢献行動意図の前段階にあたる、当事者意識の醸成有無

² Hidalgo, M.C. and Hernandez, B. (2001) : Place Attachment: Conceptual and Empirical Questions, *Journal of Environmental Psychology*, Vol.21, pp.273-281

³ 鈴木春奈, 藤井聡(2008)、地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究, *土木計画学研究・論文集*, Vol.25, No.2, pp.357-362

⁴ 関根仁美(2022)、地域属性及び個人属性からみた地域愛着の規定因に関する研究、*日本都市計画学会近畿支部研究発表会講演概要集* Vol.20, pp105-108

⁵ 長谷澤(2021)、三大都市圏居住者の地方部への地域愛着と貢献行動意図の関連--、*日本都市計画学会近畿支部研究発表会講演概要集* Vol.20, pp105-108

に着目して調査を行うことといたしました。

調査方法としては、「地域の魅力維持・向上や課題解決に対し自分ごととして捉えることができるか」の質問に対し、非常にそう思う～全くそう思わないの5件法で調査しています。

まず飛騨市に愛着を感じる人（「全く愛着を感じない」以外を選択した人）は928人（99.6%）とほぼ全員が該当することが分かりました。次に愛着の強弱についてみると（図6）、「とても愛着を感じる」「愛着を感じる」といった強い愛着を感じる人は全体の74.2%存在していることから、飛騨市のファンクラブ会員を通じた関係人口の多くが飛騨市への強い愛着を抱いていることが分かります。地域愛着を5点満点で点数化したときの平均値は関係人口全体では4.03となっていました。次に、地域愛着と基本属性との関係について調査しましたが、性別や年代、居住地、入会歴では有意な差⁶はみられませんでした。

次に当事者意識がある人（「非常にそう思う」「そう思う」を選択した人）は561人（60.2%）と過半数が該当することが分かりました（図8）。中でも特に強い当事者意識のある人である「非常にそう思う」を選択した人は141（15.1%）存在していました。当事者意識についても、基本属性との関係を調査しましたが、有意な差はみられませんでした。

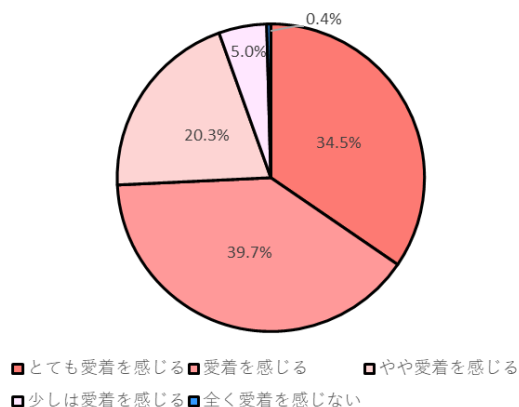


図7 飛騨市への愛着度

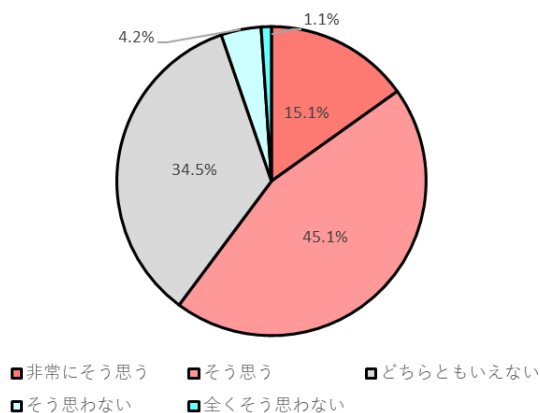


図8 飛騨市への当事者意識

⁶ 平均値の差の検定（t検定）

2-2. 土地や人との関わり

関係人口の中には、もともと飛騨市で住んでいたことがあったり働いたことがあったりと、何かしらのゆかりがある人と、もともとは全くゆかりのない人が存在しています。こうしたベースの飛騨市との関係性の違いは、地域への「思い」に影響を与えることが想定されるため、「土地や人との関わり」度合いを調査しました。

抽出した関係人口に対し、居住経験、家族・親戚の有無、友人知人の有無、訪問経験の有無を調査し、4つに分類分けをしました(図6)。複数の分類に該当する場合には図6のとおり優先順位の高い分類へ振り分けました。その結果、「地縁血縁」のある人は232人、「友人あり」の人は144人、「訪問あり」の人は476人、「訪問なし」の人は80人となり、「訪問あり」の分布人数が最も多く全体(n=932)の半数以上(51.1%)を占めていました(図7)。

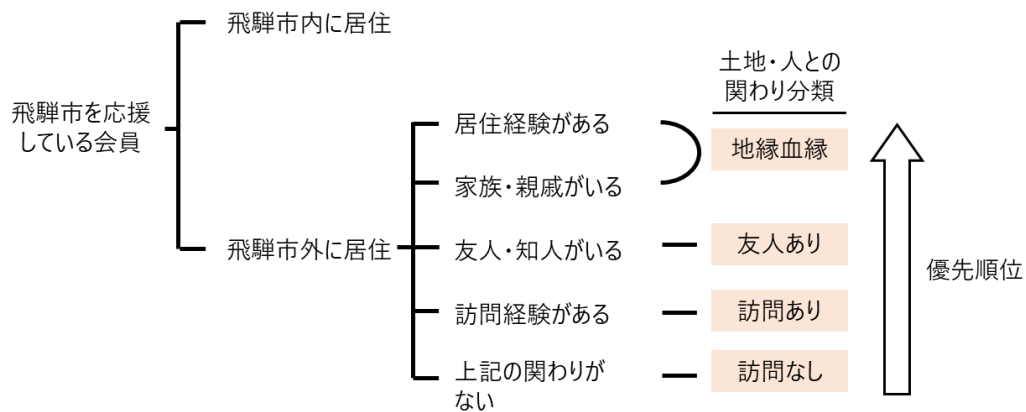


図6 土地・人との関わり分類の定義

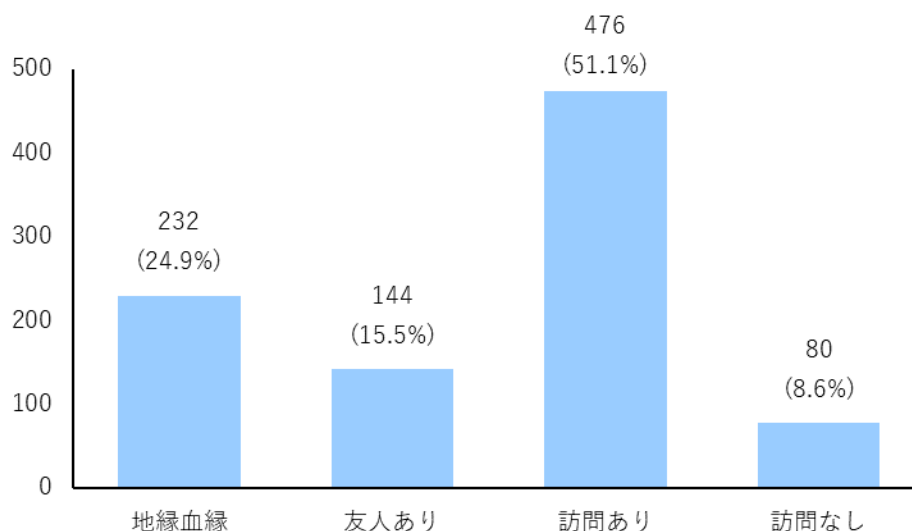


図7 土地や人との関わり別分布人数

次に、「土地や人との関わり」と基本属性（性別、年代、居住地方、入会歴）との間に関係があるかを調査しました。その結果、居住地方及び入会歴において差がみられました⁷(表1)。まず居住地については、「地縁血縁」では中部地方に住む人が多くて近畿地方や関東地方が少なく、「訪問あり」では近畿地方と関東地方が多くて中部地方が少なく、「訪問なし」では関東地方とその他地方が多くて「中部地方」の人が少ない傾向にあることが読み取れました。

よって、飛騨市(岐阜県)に近い地域に住む関係人口ほど地縁血縁者が多く、遠い地域に住む関係人口ほど訪問経験のみや関わりのない人が多くなっているが、飛騨市に友人・知人がいることは飛騨市までの距離に影響を受けていないことが分かりました。次に入会歴の平均値について、「地縁血縁」は他の分類よりも入会歴が有意に長くなっているが、地縁血縁のない分類の平均値に有意な差はみられませんでした⁸。

続いて、「土地や人との関わり」と「想い」の指標である地域愛着と当事者意識との間に関係があるか否かを確認するため、分類ごとに地域愛着と当事者意識の得点の平均値を算出しました(表2)。なお地域愛着の得点は、「飛騨市に対して愛着を感じるか」に対する答えとして「とても愛着を感じる」を5点(満点)、「全く愛着を感じない」を1点(最低点)とし、当事者意識の得点は「飛騨市の魅力維持・向上や課題解決に対して自分ごととして捉えることができる」に対する答えとして「非常にそう思う」を5点(満点)、「全くそう思わない」を1点(最低点)として数値化したものを平均値として出しています。表2より、「地縁血縁」と「友人あり」では地域愛着及び当事者意識ともに全体の平均値を上回っていること

表1 土地や人との関わりと居住地方及び入会歴との関係

土地・人の関わり	計	居住地				入会歴平均(年)	
		中部	近畿	関東	その他		
地縁血縁	232	度数	170	14	32	16	3.45
	100%	割合	73.3%	6.0%	13.8%	6.9%	
		残差	6.81	-4.01	-4.92	0.66	
友人あり	144	度数	86	21	32	5	2.71
	100%	割合	59.7%	14.6%	22.2%	3.5%	
		残差	1.51	0.24	-1.14	-1.39	
訪問あり	476	度数	234	87	142	13	2.62
	100%	割合	49.2%	18.3%	29.8%	2.7%	
		残差	-3.01	3.90	2.67	-4.30	
訪問なし	80	度数	13	8	37	22	2.20
	100%	割合	16.3%	10.0%	46.3%	27.5%	
		残差	-7.08	-1.07	4.30	8.46	
全体	932	度数	503	119	213	42	2.81
	100%	割合	54.0%	13.9%	26.1%	6.0%	

■ 残差>1.96 ■ 残差<-1.96 ※残差は調整済残差
 ***p<0.001

⁷ それぞれクロス集計（入会歴は平均値算出）を行い、カイ二乗検定を実施したのち、残差分析を行いました。残差の値が大きい項目ほど、有意に差がある項目であることを示しています

⁸ 平均値の差の検定にはクラスカル・ウォリス検定を使用し、有意な差がみられたため(p<0.001)、Bonferroni法による多重比較を実施しています

が分かり、表の「*」で示す部分について統計的に有意な差が確認できました⁹。詳しくみると、地域愛着の平均値はどの分類での平均値においても有意な差があり、当事者意識では、「地縁血縁」の平均値は「訪問あり」や「訪問なし」の平均値よりも有意に高く¹⁰、「友人あり」の平均値も同様に「訪問あり」や「訪問なし」の平均値よりも有意に高いことが分かりました¹¹。以上の結果より、土地や人との関わりは、地域への「想い」（地域愛着と当事者意識）に影響し、「地縁血縁」や「友人あり」の人はそうでない人に比べて地域への想いが強い傾向があることが明らかになりました。

表2 土地や人との関わりと想いとの関係

***p<0.001, **p<0.01, *p<0.05

土地や人との 関わり	度数	割合	地域愛着 (平均)	当事者意識 (平均)
地縁血縁あり	232	24.9%	4.51	3.94
友人あり	144	15.5%	4.19	3.78
訪問あり	476	51.1%	3.85	3.58
訪問なし	80	8.6%	3.43	3.44
全体	932	100%	4.03	3.69

2-3. 活動との関わり

関係人口が飛騨市と関わる活動として、飛騨市は表3の活動を実施しています。飛騨市の関係人口向けの施策の特徴としては、少しでも飛騨市に興味を持っている人でも対象となるような広い層にアプローチ（ファンクラブ会員制度、オンライン購買）しながら、飛騨市と関係を築きたいとする人向けに交流会や、部活動、地域の困りごと解決プログラムを提供し、飛騨市と深く・継続的に関わるような関係人口の創出を目指して施策が展開されている点にある。中でも他自治体で例を見ないユニークな取り組みとして、「飛騨市ファンの集い」があります。この活動は、ファンクラブ会員を対象として、市長や市職員らが飛騨の料理やお酒を持って都市部等に出向き、交流会を開催してくれます。ファンの集いの企画は市だけでなくファンクラブ会員が行うこともでき、飛騨市に訪れなくても飛騨市の職員や料理に触れ、会員同士の繋がりを形成することができる場となっています。

本調査では、表3の飛騨市が実施している活動への参加と、それ以外の活動（観光や帰省を主目的とするものを除く）への参加の有無や頻度、回数について調査を行いました。まず参加経験者数をみると（表4）、関係人口全体のうち何かしらの活動に参加したことのある人

⁹ クラスカル・ウォリス検定を用いて平均値の差の検定を行った結果有意な差がみられたため(p<0.001)多重比較(Bonferroni法)を実施しました。

¹⁰ p<0.001

¹¹ p<0.05

は 506 人(54.3%)と半数となりました。活動の種類別にみると、現地活動が 193 人、オンライン活動（移動を伴わない活動）が 396 人とオンライン活動の経験者が多いことが分かりました。

表 3 飛騨市ファンクラブを通じた活動内容

活動の種類	活動の名称	活動の内容	開催場所	実施時期・回数
交流	飛騨市ファンの集い	会員と市職員と飛騨市の料理を囲んで交流できる、飛騨市のお土産がもらえる	東京・大阪・岐阜	2018 年から年に 2~3 回ずつ
観光	飛騨市ファンクラブバスツアー	市長によるツアーに参加できる、飛騨市のお土産がもらえる	飛騨市内	2018・2019・2022 年に 1 回ずつ
お手伝い	ヒダスケ!	地域住民の困りごとを解決するプログラムに参加し、お礼の品がもらえる	飛騨地域	2020 年 4 月より順次
部活動	薬草部	薬草を摘んだり食べたりできる	飛騨市内	2020 年に 1 回(2022 年開催予定)
	キャンプ部	飛騨市のキャンプ場を拠点に活動する	飛騨市内	2021 年に 1 回
	お酒部	酒蔵の歴史を学び、飛騨市のお酒を楽しむ	飛騨市内	2020 年に 1 回
	おこめ部	米農家と交流、飛騨市米を味わう	飛騨市内	2020 年に 1 回
	まちあるき部	飛騨市内をあるき、まちの魅力を発見する	飛騨市内	2019 年に 1 回(2022 年開催予定)
文化財保護	石棒クラブ	石棒・文化財の保存活用活動に参加する	飛騨市内	2019 年から不定期
オンライン購買	ネットショップキャンペーン	飛騨市の地産品をオンラインで購入する	オンライン	2020 年から 2 度、期間限定で
	飛騨市オンラインショップ			2020 年 6~8 月、11 月から常設

表 4 飛騨市に関する活動内容

種類	活動の内容	度数	小計	総計
現地活動	飛騨市ファンの集い	45	193	506
	飛騨市ファンクラブバスツアー	10		
	ヒダスケ!	38		
	部活動*	49		
	石棒クラブ	14		
	その他活動	132		
オンライン活動	飛騨市オンラインショップ	167	396	
	ふるさと納税	283		
	クラウドファンディング	44		

度数：参加経験のある活動を複数回答で調査、

小計：各種類の活動に 1 つ以上参加した人数

総計：活動の種類を問わず 1 つ以上参加した人数

※部活動は薬草部、キャンプ部、お酒部、おこめ部、まちあるき部のどれか 1 つ以上に参加した人数

※ふるさと納税、クラウドファンディングは直近 1 年間の実施経験

次に活動の内訳についてみると、現地活動ではファンクラブ関連活動（表3記載の活動）とその他活動（観光や帰省を除く、表3以外の活動）があり、その他活動の経験者数が132人（14.2%）を多いものの、ファンクラブ関連活動を介して飛騨市に関わる人も一定数存在していることが確認できます。ファンクラブ関連活動の中で特に参加経験者が多かったのは、部活動や飛騨市ファンの集い、ヒダスケ！となっていました。そして、オンライン活動の活動詳細をみると、ふるさと納税が283人と全体の30.4%を占めていました。またファンクラブ関連活動である飛騨市オンラインショップ（ネットショップキャンペーンを含む）の参加経験者は167人（17.9%）存在していることも確認しました（参加頻度や回数については第3弾の報告書を参照）。

今回の調査では行政施策を通じた活動を評価するため、表3の活動を中心に調査を行っていますが、実際には他団体や企業などの活動も多くあり、多様な関わり方が存在しています。同じ関係人口という括りの中にも様々な関わり方の種類がある中で、関わり方の違いは、居住地や地域への「思い」に差があることが想定されるため、「活動との関わり」度合いを評価することとしました。

「活動との関わり」では、飛騨市の現地活動とオンライン活動に両方参加している人を「現地・オンライン」、現地活動にのみ参加している人を「現地活動」、オンライン活動にのみ参加している人を「オンライン活動」、現地活動とオンライン活動どちらにも参加経験のない人を「活動なし」として関係人口の分類を行いました（図8）。その結果、「現地・オンライン」の人は83人、「現地活動」の人は110人、「オンライン活動」の人は313人、「活動なし」の人は426人となり、「活動なし」の分布人数が最も多く全体（n=932）の半数弱（45.7%）を占めていました。

次に、「活動との関わり」と基本属性（性別、年代、居住地方、入会歴）との間に関係があるかを調査しました。その結果、居住地方及び入会歴において差がみられました¹²（表5）。まず居住地については、中部地方に住む人は「オンライン活動」に占める割合は少なく、「現地活動」または「活動なし」に多く分布する傾向にあることが分かりました。また関東地方やその他地方に住む人は「現地活動」や「活動なし」での割合が少なく「オンライン活動」

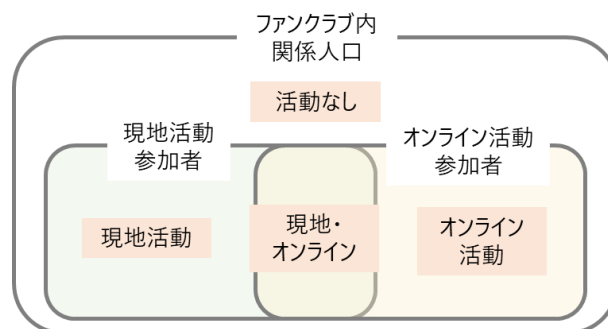


図8 活動との関わりの定義

¹² それぞれクロス集計（入会歴は平均値算出）を行い、カイ二乗検定を実施したのち、残差分析を行いました。残差の値が大きい項目ほど、有意に差がある項目であることを示しています

に多く分布する傾向にあることが分かりました。このことから、関東地方やその他地方など遠方に住む関係人口はオンライン活動のみで飛騨市と関わる傾向にあり、飛騨市の近隣に住む関係人口は現地活動に参加するか、全く関わりをもたないかのどちらかに分かれる傾向にあることが読み取れます。

次に、入会歴の平均値について、「現地・オンライン活動」や「現地活動」の平均値が全体平均よりも長く、「オンライン活動」や「活動なし」との間に有意な差が認められました¹³(表5)。この結果は、入会して時期が経っているほうが現地活動に参加できる機会が多いことや、直近2年半についてはコロナの影響により移動が制限されていたことが影響していると考えられます。

続いて、「活動との関わり」と「想い」の指標である地域愛着と当事者意識との間に関係があるか否かを確認するため、分類ごとに地域愛着と当事者意識の得点の平均値を算出しました(表6)。なお地域愛着の得点は、「飛騨市に対して愛着を感じるか」に対する答えとして「とても愛着を感じる」を5点(満点)、「全く愛着を感じない」を1点(最低点)とし、当事者意識の得点は「飛騨市の魅力維持・向上や課題解決に対して自分ごととして捉えることができる」に対する答えとして「非常にそう思う」を5点(満点)、「全くそう思わない」を1点(最低点)として数値化したものを平均値として出しています。表6より、「現地・オンライン」と「現地活動」では地域愛着及び当事者意識ともに全体の平均値を上回っていることが分かり、表の「*」で示す部分について統計的に有意な差が確認できました¹⁴。詳しくみると、地域愛着と当事者意識の平均値について、「現地・オンライン」の平均値は「オンライン活動」や「活動なし」の平均値よりも有意に高く、「現地活動」の平均値も同様に「オンライン活動」や「活動なし」の平均値よりも有意に高いことが分かりました。以上の結果

表5 土地や人との関わりと居住地方及び入会歴との関係

土地・人の関わり	計	居住地				入会歴平均(年)
		中部	近畿	関東	その他	
現地・オンライン	83 100%	度数 49 割合 59.0% 残差 0.97	14 16.9% 0.80	18 21.7% -0.95	2 2.4% -1.45	3.38
現地活動	110 100%	78 割合 70.9% 残差 3.79	9 8.2% -1.86	22 20.0% -1.54	1 0.9% -2.40	3.19
オンライン活動	313 100%	125 割合 39.9% 残差 -6.11	40 12.8% -0.73	117 37.4% 5.59	31 9.9% 3.56	2.57
活動なし	426 100%	251 割合 58.9% 残差 2.78	67 15.7% 1.44	86 20.2% -3.75	22 5.2% -1.00	2.75
全体	932 100%	503 割合 54.0%	119 13.9%	213 26.1%	42 6.0%	2.81

■ 残差>1.96、■ 残差<-1.96 ※残差は調整済残差
 ***p<0.001、**p<0.01

¹³ 平均値の差の検定にはクラスカル・ウォリス検定を使用し、有意な差がみられたため(p<0.001)、Bonferroni法による多重比較を実施しています

¹⁴ クラスカル・ウォリス検定を用いて平均値の差の検定を行った結果有意な差がみられたため(p<0.001)多重比較(Bonferroni法)を実施しました

より、活動との関わりは、地域への「想い」（地域愛着と当事者意識）に影響し、現地活動に参加経験のある「現地・オンライン」「現地活動」の人は、現地活動に参加してことのない「オンライン活動」「活動なし」の人よりも地域への「想い」が強い傾向にあることが分かりました。

これらの結果より、活動との関わりや土地や人との関わりは、どちらも地域への想い(地域愛着、当事者意識)に影響を及ぼしていることが明らかになりました。

表6 土地や人との関わりと想いとの関係

***p<0.001、**p<0.01、*p<0.05

活動との関わり	度数	割合	愛着 (平均)	当事者意識 (平均)
現地・オンライン活動	83	8.9%	4.48	4.00
現地活動	110	11.8%	4.25	3.92
オンライン活動	313	33.6%	3.92	3.59
活動なし	426	45.7%	3.96	3.64
全体	932	100%	4.03	3.69

3. 関わりと想いの分布

まず、2-1 及び 2-2 で示した地域との関わり項目とを掛け合わせて全 14 パターン(該当者が 1 人以下の項目を除く)の関わり項目を作成しました(表 7)。例えば、「地縁血縁あり」且つ「活動なし」の人は 118 人存在しています。この結果をみると、「訪問あり」且つ「活動なし」の人が 203 人と最も多く、関係人口全体の 21.8%を占めていました。次いで「訪問あり」で「オンライン活動」の人が 182 人(19.5%)存在していました。次に、分布の傾向をみると¹⁵ 「地縁血縁」の人は「活動なし」が多く、「友人あり」は「現地活動」「現地活動・オンライン」が多く、「訪問あり」は「オンライン活動」が多い傾向にあることが分かりました。

表 7 土地や人と活動との関わりとのクロス集計

土地や人との関わり		活動との関わり				計
		活動なし	オンライン活動	現地活動	現地・オンライン活動	
地縁血縁あり	度数	118	62	28	24	232
	割合	50.9%	26.7%	12.1%	10.3%	100%
	残差	2.04	-2.12	-0.39	0.36	
友人あり	度数	64	31	26	23	144
	割合	44.4%	21.5%	18.1%	16.0%	100%
	残差	-0.20	-3.03	2.07	2.77	
訪問あり	度数	203	182	55	36	476
	割合	42.6%	38.2%	11.6%	7.6%	100%
	残差	-1.68	4.19	-1.22	-2.41	
訪問なし	度数	41	38	1	0	80
	割合	51.3%	47.5%	1.3%	0.0%	100%
	残差					
計	度数	426	313	110	83	932
	割合	45.7%	33.6%	11.8%	8.9%	100%

残差 > 1.96、残差 < -1.96 ※残差は調整済残差

次に、表 7 のクロス集計したものと地域への想いとの関係を見るため、横軸を分類ごとの地域愛着の平均値、縦軸を当事者意識の平均値としてプロットしました(図 8)。全体の分布をみると、地域愛着の平均得点が高くなるほど当事者意識の平均得点も高くなり¹⁶、また地域愛着や当事者意識が高いエリアほど土地や人との関わりや活動との関わりが多くなる傾向がみられました。続いて土地や人との関わり別にみると、地縁血縁がある人は図の右側に偏っており、これは地縁血縁者にとって活動との関わりが地域への想いに与える影響が小さいことを示しています。一方、地縁血縁のない人は、図の左下から右上にかけて分布し、活動との関わりが多いほど右上に分布しています。ここで、本研究では行政の施策の効果について検討するため、影響の少ない地縁血縁者を除くことでより正確に分析できると判断し、地縁血縁者を除いた 699 人について調査を進めることとしました。

次に、図 9 で水色の層をライト層、橙色の層をミドル層、ピンク色の層をコア層とし地域との関係性で 3 つに分類分けを行いました。具体的には、地域への想い(地域愛着と当事者意識)が比較的弱く、土地・人や活動との関わりも少ない層(現地に知り合いがおらず、現地活動にも参加していない)(水色部分、ライト層)、地域への想いが中程度で、土地・人との関

¹⁵カイニ乗検定を実施(「訪問なし」かつ「現地活動」及び「現地・オンライン活動」は度数が 1 以下のため除く)し有意な差(p<0.001)であったため残差分析を実施)

¹⁶ スピアマンの相関係数 $\rho=0.44$ 、 $p<0.001$

わりと活動との関わりのどちらか一方が多い層(現地に友人・知人はいるが現地活動には参加していない、現地に友人・知人はいないが現地活動に参加している)(橙色部分、ミドル層)、地域への想いが比較的強く、土地・人や活動との関わりが多い層(現地に訪問経験があり且つ友人・知人がいて、現地活動にも参加している)(ピンク色部分、コア層)にグルーピングしました。分布人数はライト層が66.4%(699人中464人)、ミドル層が26.6%(186人)、コア層が7.0%(49人)の順で多くなっています。

以上より、地域との関係性を地域への「想い」と「関わり」によって3層に分類することをしました。今後の調査では、3層それぞれに分布する人がどのような特徴をもっているかを分析していく予定です。

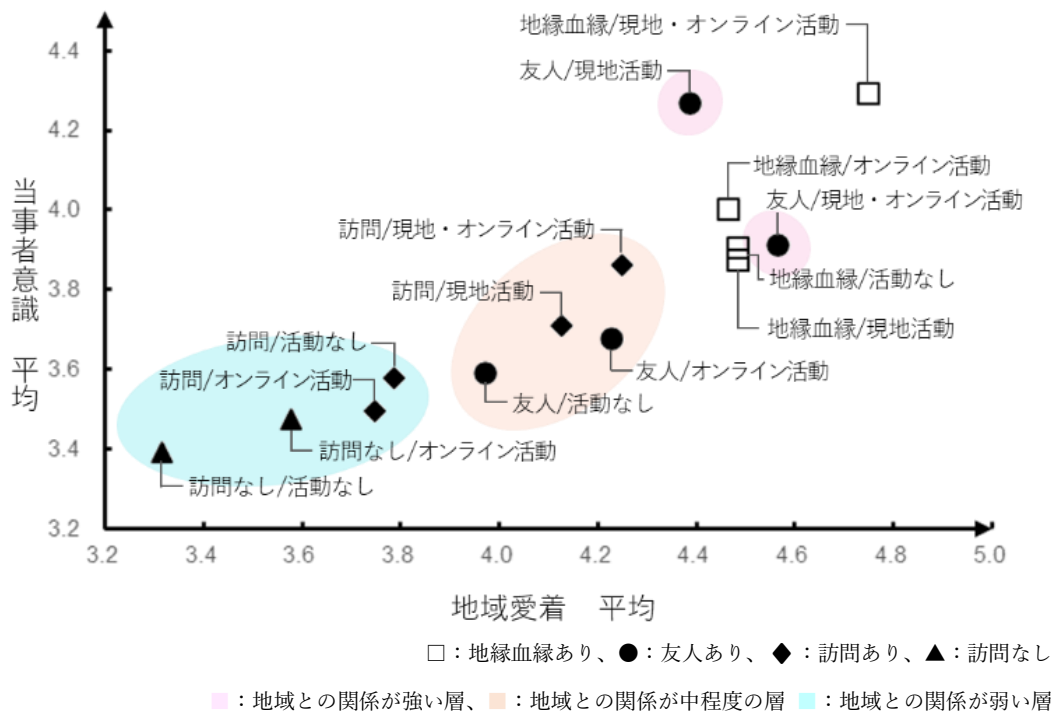


図9 地域との関係性の分布図

4. まとめと今後の展望について

第一弾の「基礎集計編」では、飛騨市のファンクラブ会員の回答者の特徴について分析し、今回の第二弾では飛騨市のファンクラブ会員制度を通じて繋がっている関係人口の特徴について、地域への「関わり」と「想い」の視点から明らかにしました。

今回明らかになったこととして、まずファンクラブ会員の関係人口の属性として、40~60代が8割程度を占めており大多数であること、また入会歴は4年以上前の人が多かったが近年入会する人が増加傾向にあることが分かりました。居住地では中部地方に住む人が半数以上を占めており、特に4年以上前のファンクラブ立ち上げ当初は中部地方の人が多かったが、年々関東地方やその他地方など中部地方以外にも会員が広がってきたことが分かりました。

次に、ファンクラブを通じた飛騨市の関係人口は、もともと飛騨市にゆかりのある（地縁血縁のある人）人は1/4程度であり、3/4程度がゆかりのない人であることが分かりました。またそのほとんどが飛騨市に一度は行ったことがあることも分かりました。居住地では地縁血縁者や友人・知人がいる人など素地として関わりの深い人は中部地方に住む人の割合が高くなっており、訪問経験のみある人は近畿地方に多く、こうした関わりの無い人は関東地方やその他地方など遠方に住んでいることが分かりました。このことから、飛騨市からの距離は地域との関係性に影響していることが分かります。一方で、飛騨市で何かしらの活動に参加経験のある人は半数程度であり、特に現地に訪れて行う活動に参加経験のある人は193人と少数派であることが分かりました。この結果と、飛騨市に訪問経験のある人が大多数であるという結果から、飛騨市に訪問してもファンクラブ活動には参加しない人が多いことが分かります。

地域愛着や当事者意識の平均値では、関わりがあるほど平均値が高くなることが分かりました。つまり関わりを増やすほど、地域愛着や当事者意識は醸成される傾向にあると言えます。また友人・知人の有無や、現地活動参加者、オンライン活動参加者、活動なしの人で分けると有意な差があることが分かりました。よって、地域愛着や当事者意識を醸成するためには、現地の友人・知人を作ったり、現地に来てもらったりすることが重要であることが明らかになりました。

そして図8の想いと関わりの分布では、地縁血縁のある人と「友人あり」且つ「現地活動」「現地・オンライン活動」の人の地域愛着や当事者意識が同程度高い位置に布置している点が面白いところです。この結果は、飛騨市に地縁血縁などのゆかりがない人でも、現地活動に参加したり飛騨市に友人・知人ができたりことによって、もともと飛騨市にゆかりのある人と同等またはそれ以上の地域愛着や当事者意識をもつことができることを示しています。もともと地域にゆかりのある人の数は限定的ですが、ゆかりのない人でも地域との良好な関係を築き当事者意識を醸成できるという点で、関係人口の重要性と可能性を再認識することができます。

今後は、地域との関係性として3層に分類したもののそれぞれの特徴や深化の要素について分析し、報告いたします。